

死者とは何か

—— 宗教者と村人の知識と信念、中華人民共和国壮族の事例から ——

手塚 恵子

はじめに

中国の村では、葬式は宗教者の主宰で行われる。これは宗教者があの世に関して抱いている信念や知識に基づいて、葬式が行われていることを意味する。その一方で村人もまた、死者に施す様々な民俗儀礼を持っている。このことは、村人もまたあの世に対して、彼ら独自の知識と信念を持っていることを示唆している。本稿では、宗教者と村人がそれぞれにあの世に関して持っている知識と信念の相似点および相違点を検討することを通して、当該地において死者が如何なるものとして認識されているかを考える。

宗教者

広西壮族自治区⁽¹⁾では、あの世に関する知識は、仏教者、道教者、民間宗教者の間で、そう大きな違いはない。武鳴県東部⁽²⁾には、二種類の宗教者、すなわち仏教者である僧と道教者である道公が活動している。この地域には、仏教寺院も道観もない。又これらの宗教者は、特定の宗派に、特別の関係を持っているわけでもない。僧や道公の宗教的な知識や信念は、師匠から弟子へと、グループ内でのみ継承される。僧も道公も、普段は農民として、家族と共に暮らしているが、村人からは聖なる人々として認識されている。村人は、彼らが神によって召命され、師匠のもとで宗教的慣習に従い、修練を積んだゆえに、神仏から葬式を司ることを許されているのだと信じている。

死者に対する宗教者の儀礼

武鳴県東部では、人が亡くなると、僧もしくは道公に依頼して、葬式を行い、墓地に埋葬する。両者は連続して行うのが標準的だが、経済的その他の理由で、埋葬だけが行われることもある。埋葬されただけの死者は父系出自集団の祖先になることができなないので、事情が許せば、葬式を後日(何十年後の場合もある)行う。

葬式は普通、二夜三日続く。この間に、僧は十八科目(発奏科、開放科、召亡科、落気科、破獄科、沐浴科、架橋科、

開燈科、金剛經、三獻科、小享科、笠樹科、荐十王科、礼堂科、給牒科、奠別科、往生箋科、送師科)の宗教的儀礼を行う(手塚 一九九七)。

この十八科目は、(一) 神仏や歴代の僧の師匠を招いて供物を献げ、送り出すもの(發奏科、開放科、三獻科、送師科)、(二) 死者に死んだことを悟らせ、沐浴させ、家に連れて帰り、供物を与えて、地獄に堕ちないよう口添えし、この世とあの世と行き来する通行手形を与え、あの世へ送り出すもの(落氣科、沐浴科、架橋科、開燈科、小享科、荐十王科、給牒科、笠樹科、往生箋科)、(三) 遺族が死者と別れをするもの(礼堂科、奠別科)、(四) 經をあげるもの(金剛經)、(五) 埋葬だけ済ませた者や異常死の死者のためのオプションで、死者の靈魂を探し、地獄から救うもの(召亡科、破獄科)から構成されている。

僧や道公が儀礼で用いる經文や儀礼文書は、全て漢語(中国語)で書かれている。儀礼言語は漢語である。

死者に対する村人たちの民俗儀礼

村人は宗教者に葬式を依頼するが、それに加えて民俗的儀礼を行う。武鳴県では、それは挽歌をうたうことである。挽歌は、死者の年齢が六〇歳以上で、その死因が自然死であり、死者の息子と男子の孫が生存している場合にのみ、うたわれる。死者の息子は、彼の父もしくは母が上記の条件を満たし、さらに彼がその儀礼の費用を負担できる場合にのみ、「息子」と呼ばれる歌い手を葬式に招く。もし死者の息子が「息子」の歌い手を招いたならば、彼の母方のオジは「オジ」という名を持つ歌い手を招かなければならない。この招かれる歌い

手は專業の歌手ではなく、他村の農民である。挽歌は彼らの母語である壮語でうたわれる。遺族はこの儀礼を持つことを非常に誇りに思い、できるかぎり、これを行おうとする。

挽歌は、葬式の第二夜に、僧達が儀礼を続ける傍らで、オイとオジが問答する形式でうたわれる。歌い手は定められた旋律に、即興で作った歌詞を載せてうたう。詞の表現は歌い手達の自由に任せられるが、挽歌は必ず四種類の部分から成り立っていないなければならない。第一部では、死者の息子と彼のオジが揃って死者を悼む。第二部では、死者の息子とオジが、二人が真のオジーオイ関係にあるのかを争い、最後にオジが、死者の息子が彼の本当のオイであることを認める。第三部では、オジがオイに、死者をあの世へ旅立たせるために、遺族が為すべきことを教える。第四部では、伝統的な知識がオジからオイに渡されたことを確認する。

相似点

葬式の場でうたわれた挽歌をテキスト化した「壮族の哀悼歌ⅠⅡ」(手塚二〇〇六、二〇〇七)は、第一部十二首、第二部五十三首、第三部八十四首、第四部三首から構成されている。分量の比率から考えても、挽歌の中心³⁾的な部分は、死者をあの世へ旅立たせるために遺族が為すべきことを、オジがオイに教える第三部である。

一方、宗教者の司る葬式は、先に挙げたように、五部構成であった。その中でも中心的な部分は、死者に死んだことを悟らせ、沐浴させ、家に連れて帰り、供物を与えて、地獄に堕ちないように口添えし、この世とあの世と行き来する通行手形を与え、あの世へ送り出す(一)落氣科、沐浴科、架橋科、開燈科、小享科、荐十王科、

給牒科、笠樹科、往生箋科)であろう。

宗教的儀礼と民俗的儀礼の両者の中心的な部分において、類似点はあるのだろうか、あるとすれば、それはどのようなものなのだろうか。

「壮族の哀悼歌Ⅱ」(手塚 二〇〇七)の第三部では、オジが次のような、為すべき二〇の事柄を教える。(一)特定の人物に整髪してもらおう。(二)死者に持たせる特別な握り飯を作る。(三)死者に持たせる特別な人形を作る。(四)遺体を包むための特別な布を用意する。(五)特定の人物に洗髪してもらおう。(六)沐浴に用いる特別な水を用意する。(七)特定の人物に入浴させてもらおう。(八)特定の人物に着替えさせてもらおう。(九)包むための特別な白い布を用意する。(一〇)特別な鶏を供える。(一一)特別なご飯を供える。(一二)特別の酒を供える。(一三)特別な線香を焚く。(一四)好まれる燭台を供える。(一五)松もしくは梅の木で棺を作る。(一六)特定の人物に納棺してもらおう。(一七)撒くための特別な米を用意する。(一八)寝心地のよい枕を用意する。(一九)特別な蠟燭を供える。(二〇)最適な埋葬地を選定する。

一、四、五、六、七、八、九は、遺体を沐浴させることについて、一〇、一一、一二は、死者に供える食事について、一四、一九は、死者の足下を照らす灯りについてうたっている。これらの挽歌がうたわれることによって、死者はお腹を満たした、ござっぱりとした姿で、足下を照らされて、あの世に送り出されると考えられている。

それでは宗教的儀礼の中心的な部分ではどうか。民俗的儀礼との比較という観点から見れば、第三部の諸儀礼のなかでも、沐浴科、開燈科、小享科の儀礼が注目に値する。以下はその詳細である。



開燈科

牌を祭壇に戻すと、僧全員で椅子の周囲を左回りに廻る。ついで椅子と机でつくった橋の下をくぐり、祭壇の左で八の字歩行、祭壇の前後で追い抜き歩行を行う。

開燈科 儀礼を始める前に僧の一人が、色紙で作った花びらを六枚並べた、水の入った椀を三椀用意する。テーブルを用意し、その椀を置く。僧全員でテーブルを囲み「開燈科」の経文をよむ。唐僧が細い棒で水を空中に撒く。手伝いが線香を立てる。唐僧が紙製の儀礼用品を押し頂いて、テーブルの上に置く。再び僧が経文を唱和する。手伝いにその紙製品を燃やさせる。唐僧は細い棒に火を付け、水の中の灯りをとす。唐僧は椀ひと

沐浴科 広場に置かれた仮位牌、供物、儀礼用品を並べ、臨時の祭壇とする。六人の僧が祭壇を囲み「沐浴科」の経文をよむ。僧のひとり(唐僧)が椅子の上に、仮位牌、櫛、はさみ、安全カミソリ、石鹸、鏡を置く。椅子の下に金たらい(水は入っていない)を置く。唐僧は水を仮位牌に振りかけ、白い紙(手ぬぐいの代わり)を金たらいにつけ、位牌を洗う作業をする。ついで右手で天地を指し示し、「罪×子消散(×は死者の姓)」と空中に文字を書く。再び水を仮位牌に振りかけ、白紙を地面に置く。手伝いが地面の白紙と他の紙を焼く。唐僧は印を結び、手に安全かみそりを持ち、位牌に鏡を見せる仕草をする。再び唐僧が印を結び、ついで櫛とはさみを持って位牌の髪を整える仕草、鏡を持って姿を確認する仕草をする。唐僧を含めた僧全員で祭壇を囲み、経文を唱和する。唐僧が仮位



小享科

つを捧げ持ち、僧のひとりに手渡す。その僧は棺の上にそれを置く。唐僧は同じ行為を二度繰り返し、三椀とも棺の上に置かせる。

小享科 棺の側のテーブルの上方には御幣がつり下げられ、テーブルの上には仮位牌の他に、線香や椀に盛りつけられたアヒルや鶏などの食べ物が供えられている。神仏には肉塊で供えるのに対し、死者には、食べやすいように、肉が細かく切り分けられているものを供える。僧全員でテーブルを囲んで「小享科」の経文を昭和する。唐僧と僧一人が椅子に座り経文をよむ。手伝いが線香をテーブルの両端に供える。唐僧が経をよみ終えると、僧の一人がテーブルの上の紙類を一枚とって、その足下で燃やす（手塚 一九九七年）。

このように僧は沐浴科では、死者の象徴である仮位牌に対して、沐浴や整髪をしてやり、開燈科では、棺の上に特別な灯明を供え、小享科では、死者に調理された食物を供える。このようなパフォーマンス(行為)によって、僧は死者を清潔にし、食事を与え、その往く道を照らしてやるのだと考えられている。

このように宗教的儀礼と挽歌を並べてみると、沐浴させること、食事を供えること、道中を灯りで照らすことが、両者に共通していることがわかる。これは僧と村人が共に、生者にはあの世に旅する死者のために、してやらなければならない一連の務めがあると考えていることを示して

いる。

共通する由縁

ワトソンは、中国の死者儀礼を「葬式」と「死体処理の儀式」に分けて考えることを提唱している。「死体処理の儀式」は地域によって異なり、そこには普遍的な基準は見られないが、「葬式」には少なくとも明清時代までには、次のような一定の構造が現れたという。

- ① 哭や他の嘆きの表現によって、死を公告すること。
- ② 服喪者が、白衣、白靴、白頭巾を着けること。
- ③ 遺体の儀礼的な沐浴。
- ④ 生者から故人への食物、金、あるいは物品を贈ること。
- ⑤ 死者の位牌の準備と設置。
- ⑥ 儀礼化された金銭の用い方と、儀礼専門職への支払い。
- ⑦ 遺体に伴い魂を鎮める音楽。
- ⑧ 遺骸の密閉納棺。
- ⑨ 共同体からの棺の排除。

これらの儀礼の始まりを確認することはできないが、儒教の古典のなかに、類似する記述を見ることができるといえる。

(ワトソン一九九四)

君主が亡くなると、まず喪主となる者が涕泣し、兄弟が哭泣し、婦人は哭踊する（『礼記』喪大紀第二十二、竹内、一九七一年、六六二頁）。

（死者に沐浴を加えるには）まず管人（家屋管理の者）が井から水を汲んだ釣瓶を、綱を付けたまま、それを屈めて持ち、堂の西階を登り、登りきった所で水を近侍の者に渡す。近侍は水を持って入り、水浴を行う。（その作法は）小臣が四人で掛けふとんを挙げ、近侍が二人で湯をつかわせる。浴水は水盤に入れ、汲むには料（というひしゃく）を用い、洗うには薄い布巾を用い、拭い乾かすには浴衣を用いるが、これは生前に同様である（『礼記』喪大紀第二十二、竹内、一九七一年、六七〇頁）。

献げる品々は遺骸の東に置かれる。醴酒と酒を持つ者は北面して、西を上にしておく。次に豆をおき、俎（塩漬け肉を載せたもの）は豆の東に置く（『儀礼』、池田、一九八五年、一四〇頁）。

楽師は葬儀において楽器を並べ、演奏する。死者のために哭す時にも同様にする（『周礼注疏』卷二二）。

主人を始め、男女皆が遺体を奉じて、棺の中に納める。……それから棺の蓋をする。……それから（棺を泥で）塗る（『儀礼』、池田、一九八五年、一六五頁）。

ここであげた「儀礼」「周礼」「礼記」という書物の成立は、紀元前後に遡る。しかしワトソンのいう一定の構造を持った葬式が中国の一般大衆に広まっていったのは、宋代から明末清初である。ロウスキによれば、宋代までは葬礼や祖先祭祀は支配者と士大夫階層にのみ許され、庶民には禁じられていた。そのため庶民階層に仏式、道教式の民間儀礼が普及していく。これを憂いた朱子が庶民の間の逸脱した儀礼を正式な古典的儀礼と入れ替えるよう求め、『家礼（家庭生活のための儀礼書）』を著す。十三世紀に入ると、儒教教程の教育を受け

た官僚(科挙官僚)が国中に配置される。この政治的変化とこの頃急速に発達した印刷技術が相伴って、儒教式の儀礼を広めていく。清代になると地方役人や教養人たちが、規範となる儀礼を示す各種の手引き書を執筆するようになる。このようにして、葬儀の画一化は帝国中に及んでいった(ロウスキ 一九九四)。

広西省(広西壮族自治区)は、中華帝国の辺境である。さらに壮族は漢族ではなく、帝国期には「蛮」のひとつであった。

先に挙げた僧の主宰する葬式は、ワトソンのいう構造に、従うのであろうか。先の事例では、僧の行う儀礼科目において、③④⑤⑦が実施され、遺族や親戚によって①②⑥⑧⑨が実施されている。帝国の辺境にある武鳴県の葬式においても、ワトソンのいう儀礼の構造は、ほぼそのままの形で存在している。

村人の挽歌はどうだろうか。挽歌の詞章は①③④⑧⑨を含んでいる。欠けているのは②⑤⑥⑦である(この部分が欠けている理由は次章であきらかになる)。

僧の主宰する葬式は、ワトソンのいう一定の構造にびたりとあてはまる。村人の挽歌もまたワトソンのいう一定の構造のうちにあるが、或る部分を欠落させ、或る部分を増補している。さらに僧の主宰する葬式の儀礼科目と、挽歌の詞章の間の共通する部分である「死者をあの世に送り出す為に遺族が為すべきこと」を、ワトソンのいう構造との関係でみると、それが③遺体の儀礼的な沐浴と④生者から故人への食物、金、あるいは物品を贈ることに相応していることがわかる。

相違点

中心的な部分において、民俗儀礼と宗教儀礼は共通性をみせる。しかし僧の行う葬式と村人の挽歌には、大きく異なる点もある。

葬式の破獄科では、「地獄」と記された五脚の椅子が並べられ、さらに机と椅子を使って橋が組み立てられる。その後僧は仮位牌を手にして橋の下をくぐり、各々の地獄を訪れ、槍でたたき壊す。架橋科では、僧は仮位牌と共に橋を渡り、橋の反対側で待っている死者の息子にそれを手渡す。荐十王科では、僧は仮位牌を手に、「秦広王」「初江王」「宗帝王」「伍官王」「閻魔王」「變成王」「泰山府君王」「平等王」「都市王」「五道転輪王」と記された十脚の椅子を巡る。給牒科では、仏教者は位牌に御札を貼り付ける。

これらは、僧が死者を地獄から救い、彼の(息子の)家に連れて帰り、さらに再び地獄に落ちないように十王殿を通過させたうえで、死者にあの世と子孫の家を自由に行き来できる文書を与えるという儀礼である。

「破獄科」や「荐十王科」の儀礼を僧が行うのは、地獄にいる限り、死者は父系出自集団の祖先となることができず、その結果として、子孫達から供物を受け取ることもできないと考えるからである。これらの儀礼の存在は、僧が葬式において是が非にでも、死者を祖先に転位させなければならぬと考えていることを示している。この考えを象徴的に表しているのが位牌である。位牌は、葬式を終えた死者にだけ作られる。そして位牌のある者だけが、祖先として家に祀られるのである。

これとは対照的に、挽歌の歌い手たちは、祖先という觀念に興味を持っていない。その代わりに、母方のオジという着想に収斂していく。「壮族の哀悼歌Ⅱ」（手塚二〇〇六、二〇〇七）所収の、一五三首からなる挽歌では、第二部に含まれる歌が全体の三分の一の量を占めているが、この部分は死者の息子が眼前のオジが本当に彼の母方オジかどうかだけを吟味する箇所である。第二部の全体に占める比率から考えると、誰が誰のオジなのかをはっきりさせることは、第三部に負けず劣らず、重要なことなのだと思われる。

さらに「息子」のうたう第四部の次の詞章「オジさんは昨夜やつといらつしやいました。頭がぼんやりするほど教えられました。私たちの考えが大きな流れと通じるようになりました。私たちは一言一言記憶します」（手塚二〇〇七、歌番号一五二）は、挽歌のいう母方オジの持つ知識というものが、母方のオジの持つ知識そのものを指しているだけではなく、ある共同体の共有する知識をも指し示していることを示唆している。

壮族は族外婚を実施している。それゆえ、Aという出自集団に属するひとり男の持つ知識が、彼のオイ（彼の姉妹の息子）に伝承されるということは、その男の知識が非Aの出自集団であるB（彼の姉妹の嫁いだ出自集団）へと伝承されることを意味する。このようにして、その知識は、ひとつの出自集団から別の出自集団へと伝わっていく。理論上は、あの世に関する知識は、婚姻圏という共同体で共有されていく。挽歌の歌い手の、死者は彼の息子の母方のオジの持つ知識に従ってあの世に旅立つべきであるという言明は、同時に死者は彼の属する婚姻共同体の持つ知識によって旅するべきであるといっているのである。

結 論

宗教者と村人は、死者をあの世に送り出す方法に関して、その知識を共有している。一方で、宗教者と村人は死者とは何かという点について、異なる信念を持っている。宗教者は死者は父系の出自集団の祖先になるべきだと考え、村人は死者は婚姻関係によって結ばれた共同体のなかに位置付けられるべきだという。

死者儀礼の中心部分である「死者をあの世に送り出す方法」は葬式と挽歌で重複しているから、死者を父系出自集団に位置付ける葬式＋埋葬というIパターン、もしくは死者を婚姻で結びついた共同体の中に位置付ける挽歌＋埋葬というIIパタンの、どちらか一方だけを、死者儀礼とした方が、すっきりするようにみえる。しかし現実はそのような選択はせず、A埋葬のみ。B葬式＋埋葬。C葬式＋挽歌＋埋葬という三パターンをとる。そのなかでも、互いに対立する理念を抱えたCが、最も威信のある死者儀礼とされる。

この二つの考え方は対立して見えるが、必ずしもそうではない。壮族は父系の社会を形成し、人々は族外婚を行う。それゆえ彼らは彼らの集団を維持するために、同じ通婚圏に属する、異なる父系出自集団を必要としている。生きている人間は、父系出自集団の成員として生きると同時に、婚姻で結びついた共同体の一員としても見なされる。これらはひとつの事柄の、異なった側面なのである。そのように考えられているからこそ、パターンCが最も良い死者儀礼とされるのであろう。

注

- (1) 壮族は中国で最も大きな人口を持つ少数民族である。彼らはタイ語に非常に近い言葉である、壮語を母語としているが、多くの人々は西南漢語あるいは広東語といった漢語を使うことができる。壮族の文化は、広東や中原の漢族文化の影響を強く受けている。
- (2) 武鳴県は広西壮族自治区の首府である南寧市に隣接する。県の中心地には漢族も居住するが、郊外は壮族の農村である。首府に近い県であるが、壮族の文化は、なお健在である。またこの地域の壮語は、現在壮語の標準音に採用されている。
- (3) 挽歌の歌い手となるのには、いくつかの条件がある。そのうちのひとつは、オジがオイに教えるべき事項を過不足無く知っていることである。

文献

- 『十三経注疏3周礼』藝文印書館
- 池田末利 一九七五年『儀礼』東海大学出版会 訳は一部改めた。
- 竹内照夫 一九七一年『新釈漢文体系 礼記』明治書院
- 手塚恵子 一九九八年『死者儀礼における親族集団の役割—中華人民共和国壮族の事例より』『比較日本文化研究』四号 待兼山比較日本文化研究会
- 手塚恵子 二〇〇六年『壮族の哀悼歌Ⅰ』『アジア民族文化研究』五号 アジア民族文化学会
- 手塚恵子 二〇〇七年『壮族の哀悼歌Ⅱ』『アジア民族文化研究』六号 アジア民族文化学会
- エブリン・S・ロウスキ 一九九四年『歴史家による中国葬礼の研究法』『中国の死の儀礼』平凡社(Death ritual in late imperial and modern China/ edited by James L. Watson, Evelyn S. Rawski/ University of California press.

Berkeley, 1988)

ジェイムズ・L・ワトソン 一九九四年「中国の葬儀の構造―基本の型、儀礼の手順、実施の優位」『中国の死の儀礼』平凡社 (Death ritual in late imperial and modern China/ edited by James L. Watson, Evelyn S. Rawski/ University of California press, Berkeley, 1988)

本論文は平成十九年度京都学園大学学外研究員助成研究による研究成果のひとつである。関係各位に感謝を表す。